

●春日部市民文化講座（第 8 回） 「千利休のわび茶 ～その 3 ー利休の弟子たちー」

◆日時：2013 年 11 月 27 日(水) 11 時（ばばら春日部 4 階会議室）～12 時



■戦国時代になぜ茶の湯が流行ったか？

今日お話ししようとしていることは、何であの戦国時代に茶の湯が流行ったのかということなのです。これは私がずうっと考えてきたことですし、皆さんにもお読みいただいた『茶の湯の心で聖書を読めば』（高橋敏夫著、Forest-Books）を書いたときに、原稿の中に相当突っ込んで書いたのですけれども、その部分は出版社にほとんどカットされてしまいました。

■文人達の心を渴ききらせた応仁の乱

応仁の乱（応仁・文明の乱、1467-1477 年）で、室町幕府が崩壊し、ここで京都がほとんど焼け野原になってしまうのです。この戦いは、8 代将軍・足利義政（銀閣寺を造った）の継嗣争いなどから、東軍の義政と室町管領家の細川勝元（龍安寺を造った文人）、西軍の山

名宗全らの守護大名との間で 10 年間続き京都をむちゃくちゃにしてしまったのです。この時に文人や知識人達は京都で生活できなくなり、奈良や堺に疎開して逃げていったのです。そういう中で下克上という、これまで支配していた守護大名達が家臣に裏切られて自分たちの権力を失っていく訳です。そして新しい精力として家臣達が領地を支配するというのが日常茶飯事に起こったのです。だから世は殺伐として、知識人達、文化人達、和歌を嗜む人達の心までも本当に渴ききっていたのです。

■茶の湯は渴きを癒やすに留まる

裏千家の大宗匠がこういうことをおっしゃっています。「利休さんのわび茶について、利休さん自身が“自分の茶とは渴きを癒やすに留まる”のだ。この渴きは単に喉の渴きを言っているのでしょうか。そうではありません。私たちが渴くのは何も喉だけではありません。心の渴きという私達にとって根本的なともいえる渴きがあります」と。戦国の武将達にとっては下克上の時代で、町衆の人たちも商人達も心の渴きをどうして癒やそうかという中で、利休さんの茶、“りくうの茶”という言葉がある時から人々の口に上るのですね。それから“利休型”という茶碗なんかが出てきます。その頃には利休さんのわび茶は、どんどん完成に近づいていたと思います。

■茶の湯を使って人心を掌握していく信長に

そういう戦いが続いて京の都が形を失っていく中で、武野紹鷗は四畳半を中心とした“わび茶”を堺で作りあげていくのですね。その中に、利休さんとか、日比屋了慶とか、北向道陳（きたむかいどうちん）とか、今井宗久（そうきゅう）、津田宗及（そうぎゅう）というような人たちがいたわけですね。その中で何故か利休さんだけが突出したように出てくるのですが、実は、今井宗久、津田宗及、千利休たちは信長に取り立てられて“お茶頭（さどう）”、お茶を自分の家来達に教えるだけでなく、信長の“御伽衆（おとぎしゅう）”ブレインにもなるわけですよ。そして何故か、織田信長の感性だと思いますが、彼は“茶の湯”を持って自分に従う人達の心を掌握しようとしたのです。“茶の湯”を通して人と人とのコミュニケーションを取ろうとした。心は見えませんが、その心が寄っていく茶道具、茶入とか茶碗とかがありますよね。そういうものをまず、信長は堺衆やさまざまな茶人から、彼らが良いといっている道具を相当な金子をもって集めていくのです。それを一堂に集めて見せたのが、あの本能寺の茶会なのですよ。そして、光秀がここぞとばかり狙い撃ちして信長は死ぬわけですね。ですから、あれは凄い茶会だったのですよ。当時、室町時代から伝わっていた唐物（からもの）と言われる中国産の名物や牧谿（もっけい、13 世紀後半の宗末元初の僧、水墨画の名人）の絵もあったでしょうね。

■キリシタン大名であった利休の弟子たち

この「山姥文庫」（写真）は「利休 400 年忌」の時に初めて表千家から出されたものです、ぼくは直接お家元から見せていただきました。実はこれはエデンの園で、女エバが禁断の実をとって夫のアダムに与えている一場面なのです。これはカソリックの礼拝・ミサ、葡萄酒を飲み、パンをいただくときのパン入れなのですが、これが初めて世に紹介されたのです。これはね衝撃的でした。当時、而妙斎（表千家 14 代家元・当代）宗匠が、こういうふうにかかれていたのです。「普通に利休に語られている場合、利休が長年禅宗に皈依していたところから、また江戸時代は全くキリスト教が顧みられないことがあったので、両者の間には何の関係もなかったと思われがちです。しかし、小西行長、高山右近の二人は代表的なキリシタン武将であり、利休の門人として名高い牧村兵部、瀬田掃部、黒田官兵衛、蒲生忠三郎（氏郷）など、右近によって入信し、受洗した人々であったと思いますと、利休だけが全く影響を受けなかったと



は言いがたくなってくるのです。特に利休切腹の時、嗣子(しし、自分の子ども)少庵を預かってくれた蒲生氏郷は、洗礼名レオンといい、当時の領地・伊勢の国の約 10 万の人々をキリシタンにするために宣教師の派遣を求めているのです。」云々としています。この右近によって入信したと思われるのは、天正 13 年頃のことですね。バタバタとみんなが洗礼を受けたのです。また、而妙斎宗匠が織田有楽斎のことを挙げて、彼は洗礼を受けたキリシタンと言われています。そして、彼の造った茶室「如庵(じょあん)」が三井さんの所にあった頃に、三井さんのところで発行していたオリジナルのパンフレットの一つに「この如庵という名前はポルトガル語のヨハンと言われています。だから彼もキリシタンと思われる」ということを書いています。

■茶室「如庵」に込めた理想の生き方

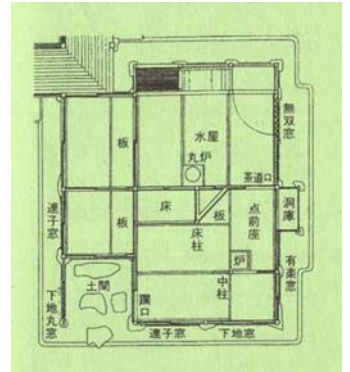
つい最近お目にかかった建仁寺の正伝院の和尚さん曰く、「正伝院の中に中村昌生先生(なかむらまさお、建築学者(日本建築史)、表千家との関わりもある方)が、監修して「如庵」を造ったときに、久田宗也宗匠が言っていたよ。如庵の床の間と鱗板と水屋の間にある三角の空間に、有楽斎はマリア像かキリスト像を置いていたのではないかと…」。「如庵」は何回も移築されていますので、今ここには何にもありませんが、本来はマリア像やキリスト像があったのではないかと思います。有楽斎が造った「如庵」という茶室の見所はいろいろあるのですけれども、「鱗板」という何故か三角形の板が床の脇にあるのです。半東(はんとう、茶の湯で亭主を補佐して茶事を手伝う役の人)が入って来てここを踏んでいいのです。亭主が点前座で点前をしていますので、これだけの空間があると、半東が入って来ても亭主の邪魔をせずに、粗相のないようにお運び(サービス)ができるのです。ところが、この空間を造ったために、床の間と鱗板と水屋の間に三角の空間ができてしまいました。さあ、今日のキーポイントは、本当はここなのです。あまりにも分からない事が多すぎるのですよ。そして、織田有楽斎も信長、秀吉、家康と 3 代続けて仕えて、彼はほとんどが交渉役です。そこで、これはぼくの考察なのですが、やはり織田有楽斎が洗礼を受けているとすれば、イエス様の 12 弟子の中で一番若い人はヨハネでした。そして一番長生きしたのもヨハネでした。このヨハネという人は「愛の弟子」と言われています。そして最後、晩年は殉教しています。もし、この「如庵」という茶室に、自分の洗礼名を付けたとすれば、彼の生涯を通しての理想の生き方というのがあって、信長の時代からいる訳ですから、「もう戦は嫌だ」だから戦はしない。だから茶の湯のにめり込んだ。それは心が渴いていたからではないでしょうか。そして、そのヨハネのイメージを描いて死んでいった。そして「如庵」という茶室を世に残して…。今、戦国時代から遺っている茶室、国宝になっている茶室が 3 つあります。利休さんが遺した「待庵(たいあん)」。織田有楽斎が遺した「如庵」、そして大徳寺龍光院の「蜜庵(みつあん)」があります。この「蜜庵」は見ることができません。ぜひ見たいと言ったら、お寺に入門しなさいと言われたので、その機会がないので見ていません。

■異なる者同士が座して和することが「わび茶」

ぼくは自分の属する表千家が一番保守的でキリスト教嫌いだと思っていたのですよ。ところがねえ、今、裏千家の大宗匠に期待しているところがあったのです。ぼくが研究を始めた頃に、大宗匠とお会いした時に、「高橋さんね、私はそのバチカンにある宣教師が送った書簡の中に、茶の湯についての記録が膨大な量があると思うのです。それを自分のライフワークにしたいよ」っておっしゃったのです。この言葉でぼくはものすごく励まされて、今まで期待していたのですが、最近、聞こえてくる大宗匠からの言葉は遺憾ですね。完全に禅宗返りしたのです。つい最近ですが、面白いことがあったのです。大徳寺の前田昌道(しょうどう)和尚をアボ無しで訪ねたのですよ。そこで、「在主庵」という扁額を書いていただけませんかとお願ひしたのですが、彼は「在不庵(ざいふあん)」といい、私は「在主庵」で、お互いに知っていて挑戦してくるのですよ。これがいいんですね。彼からは直ぐに「在主庵」という扁額の書が送られて来ましたが、日本の文化を先導してきた禅宗の哲学には「神はいない」のですよ。本当に絶対なるものは「無」なのです。お互いに異なる考えを持つ者同士でも一座になれる、これが「茶の湯の心」なのです。異なる者同士がそこに座して飲み食いする、これが利休さんの「わび茶」の極みなのです。

■日本人の心に浸透した利休の「わび茶」

古田織部の「泪」を見ていると、織田有楽斎にしてもそうですが、戦国の武将たちは真剣に一途に何かを求めている、それを茶の湯の中にそれぞれが、それぞれの意味を持って見出したからこそ、次々に伝わり、そして江戸時代になってからは中期には町人にまでずうっと浸透して日本人の心になってきました。それはひとつの形としても、利休さんが草庵の茶室を発明し、ご自分の「わび茶」に相応しい道具を発明し、その立ち居振る舞いであるお点前も発明した。これが利休さんから続く千家に流れてきている「茶の湯」であると言えますね。



この回で初めて伺った織田有楽斎の「如庵」のお話は面白いものでした。